ペルソナ３ - AAA DEN-O from -

ORATORIO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペルソナ３　－　ＡＡＡ　ＤＥＮ－Ｏ　ｆｒｏｍ　－

【Ｎコード】
Ｎ８５４０Ｑ

【作者名】
ＯＲＡＴＯＲＩＯ

【あらすじ】
少年は１０年ぶりに帰ってきた。
全てを無くした場所に…全てを手に入れた場所に…
自分に…運命にケリをつける為に…そう、ミンナと！

「最初っからクライマックスだぜ！」
「お前…僕に釣られてみる？」
「俺の強さにお前が泣いた！」
「お前倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」

今、時の狭間の闘いが始まる。

序章／10　year　ago（前書き）

龍牙様のサイトに投稿しているものです。
許可をもらいこちらでも投稿する事にしました！
どうか、楽しんでください。

序章／10　year　ago

１９９９年…対シャドウ人型兵器、最後の一体が『死（デス）』を封印し、機能を停止してすぐに…その四つの光は封印の『依り代』の周りを漂っていた。

「まったくあの『娘（こ）』、無茶するよね～。人間…しかもこんな子供の中に『死』を封印するなんてさ。人工的に造られた僕達にだって解る事なのに」

「……」

青い光が『依り代』の周りを漂いながら、気軽に言う。赤い光は依り代を見ている。

「ホントだね～、この子もうダメだよ～。体の崩壊が始まってる」

「そんなコトより、俺らも早く寄り代を見つけんとな」

そう、このままでは自分達は不便だ。自分達はあの『連中』とは違うが、依り代を見つけたほうが何かと都合がいい。

「そうだね。行こうか…どうしたの？」

赤い光が動かないのを見て他の光達も止まる。

「ねぇ～、早く行こうよ」

「…テメェらは行け。俺の『依り代』はコイツだ」

「な、なんやて！」

「本気（マジ）！？」

「でも、これもうダメだよ？」

「うるせェ！　中から押さえりゃなんとか使えんだろうが！　いいから行けよ！」

三つの光は互いを見合わせる。赤い光の言っている事は無茶だ。

いくら自分達が『特殊な存在』の中でもさらに特異になるとはいえ、この『依り代』に入っている『死』は自分達が確認した『１２体』とはあからさまに違う。

それを承知で赤い光はこの『依り代』の中に入るといっているのだ。

理由は簡単…この粗野な喋り方の赤い光は…

「まったく、甘いんだから。たった一人で抑えて、まともに生活できると思ってんの？」

「…うるせえよ。このガキはな、『俺達』と同じなんだよ…」

『……』

自分達の生い立ちを思い返す…

「入れば、このガキは死なねぇし、俺は話し相手ぐらいできる。だ

から…」

「じゃっ、二人ならさらに安定するね」

「何？」

「三人なら、楽勝やろ」

「僕も入る～」

「お、お前ら…」

「ま、この際、付き合うよ」

「俺らが入れば、普通に生きられるやろ」

「ちっ…お前らも甘ちゃんじゃねぇか」

「かもね」

「じゃ、入ろ～」

「よし…行くぜ！」

四つの光は『依り代』…少年の体に入っていく。

『よろしくな』

序章／10　year　ago（後書き）

タロウズは特殊なシャドウでペルソナという設定です。

第一章／帰ってきた少年と…

『巌戸台。本電車は巌戸台に到着しました』

プシュ～…

大幅に遅れた電車が到着する。

「ふ～、間に合った～」

少年は溜息を吐きながら電車を降りる。

「もうちょっとで、『時間』になるとこだった」

少年は腕時計を見る。時刻はすでに１１時５５分を超えている。

「電車の中で『時間』が来たら退屈だからな」

『お前にしてはついてたじゃねぇか、良太郎』

『そうだね、モモ』

少年…良太郎は頭の中から響いてきた声に心の中で返事をする。

そのまま少年は改札口に向かい、切符を入れて出る。そして…駅の出入り口に出た瞬間…『時間』が来た。

世界がガラリと変わる。景色は緑色に染まり、地面には怪しい血のような跡が現れる。

何よりも異様を放つのは、魔が増して全てを吸い込むような魅力を得た月と、『棺』へと変化した人間の姿だった…

少年はそんな世界を臆せず歩く。歩きながらイヤホンを外してぼやいた。

「あ～あ、お気に入りのサビパートだったのにな。ついてないや」

先程まで軽快なユーロビートを響かしていたイヤホンからは何の音も聞こえない。

「しかし…」

良太郎は辺りを見回す。

「十年ぶりか…」

『どうだ良太郎。懐かしいか？』

さっきの声が聞こえる。

「う～ん、久しぶりすぎて実感ないや。所々変わってるだろうし…みんなは？」

今度は周りを気にしなくていいので、声を出して返事をした。

『僕達もあの時は必死だったからね。覚えてないよ。でも…』

違う声が頭に響く。軽いような口調だが、この声は辺りを警戒して

いるようだ。

「どうしたの？　ウラ」

『どうやら爪跡は残ってるみたいだよ…しっかりとね』

「…そう」

『いいんか？　良太郎』

また別の声が聞こえる。今度は重く、男っぽい声だ。

「どうしたの？　キン」

『今ならまだ引き返せる。どうや？　俺らなら最後まで…』

「ううん。選んだんだ、僕は…」

良太郎は拳を硬く握って、

「運命に、一矢報いるって。まあ、ついでに『復讐』もしちゃうけどね」

『良太郎がそういうなら、僕頑張るよ』

「リュウ…」

最後に、子供っぽい声が聞こえた。

『いいぜ。付き合ってやるよ』

『僕達も頑張りますか』

『おっしゃ！　俺に任しとけ！』

聞こえる四つの声…良太郎はその声に…

「みんな…ありがとう…」

泣きそうな声でそういった。

『僕の調べた所、『桐条』はまだ『アレ』の研究を続けてる。それもかなり大きな規模で…『グループ』の経常利益をかなり誤魔化して』

『目的地』へ向かう途中、良太郎達は情報をまとめていた。

「それはどれぐらい？」

『マルサの女が行かないのが不思議なくらい。隠蔽工作もバッチリみたいだね。もっとも、シャドウを倒す研究をしているのか、シャ

ドウを利用する研究をまだしてるのかはわからないけど』

「どうして？」

『見た感じはシャドウを倒す研究をしてるんだけどね…いつでも倒せるようになったら、次にする事は…』

「なるほど…油断ならないね」

この『声』達のお陰で、良太郎の『力』はかなり大きかった。

情報面と金銭面は『ウラ』の担当だった。

「でもよく調べられたね」

『甘いんだよ。僕にかかれば簡単に釣り上げられるね。釣り後を知られるようなヘマもしてないよ』

『僕も僕も！この間、良太郎が眠ってる間に、出張してた社員捕まえて聞いたよ』

『調べたの僕だけどね』

『いいの！　僕の『力』がなきゃ聞けなかったんだから！　でね、ケンキューの殆どはここに集まってるんだって！』

「ふ～ん」

『これだけで、良太郎の『復讐』は完遂できるかもよ？』

「そうだね…それはそれで考えとこう。着いたよ」

良太郎は『目的地』に到着した。『月光館学園　巌戸台分寮』…

「まさか、高校に通うとは思わなかったな」

『いいじゃねぇか。普通は通ってんだろ？』

「そうだね…」

良太郎は扉を開けて、中に入る。

「なかなかセンスいいね」

ロビーは中々立派だった。ソファーに奥に見えるテーブルに、なんとカウンターまである。

『高校生の寮にしては、珍しいね』

「うん、そ…」

「……遅かったね」

良太郎は声のする方へ振り向く。そこで一人の少年がこちらを見つめている。

「長い間、キミを待っていたよ」

「ああ…僕もだよ」

「……」

少年は驚いた顔で良太郎を見る。

「驚くことはないよ？互いに待ち合わせの場所でやっと出会っただけだ」

「そう…そうだね」

少年は黙り込み、少しずつ口を開く。

「この先へ進むなら、そこへ署名を…」

『…署名だと？　テメェ一体自分が何様のつもりで…』

「…一応契約だからね」

言われてカウンターを見ると、そこには宿帳の様な物があった。

「怖がらなくてもいいよ。ここから先は自分に責任を持ってもらう

っていう、当たり前の内容だから」

少年の言葉に従う様に宿帳を開く。

「…なるほど。つまり覚悟しろってことだね…」

受け取った宿帳らしき物に良太郎は迷いなく鮮やかに

『野上　良太郎』

と署名した。

覚悟なんて…とっくの昔に出来ている。

「時は、全ての者に結末を運んでくる。例え眼と耳をふさいでいても
ね」

「ああ…だから僕は来たんだ。眼を開いて、全てを聴く為にね」

「…ごめんなさい」

少年は謝罪する。

「気にする事はないよ…僕が決めた事だ。それに…」

「だれ！」

突然大きな声が聞こえる。声の聞こえた先にいるのは一人の少女。
ショートカットの中々可愛らしい少女で、ピンクのカーディガンを着ているが、どうやら月光館学園の女子制服らしい。

良太郎はいつものポーカーフェイスだったが、実は内心かなり驚いていた。

この『時間』を生きている人間を初めて見たからだ。

（この時間を『生きてる』なんて…何者なんだ？）

『良太郎。この女は多分『ペルソナ使い』だ』

（ペルソナ使い…心の海に存在するもう一人の自分を呼び出す力を持つ人間…）

『俺ら以外に『あいつら』を倒せる人間やな』

（ここにいるって事は、桐条はやっぱり？）

『ああ、シャドウ対策としてペルソナ使いを集めてるんだろうね。昔、かなり無茶な研究をしてたみたいだけど…』

（ふ～ん…）

「あなた何者！」

女子高生が主人公に声を荒げて質問する。

「ん？見ての通りだけど？」

良太郎は警戒されないように振舞ったが、女性はさらに警戒したようで、足につけているホルスターから銃のようなものを抜き取る。

（あれは…）

『召喚機…だね。戦闘体制に入っちゃったよ、どうする』

（どうするもこうするも…向こうが先にぶっ放さなきゃ手が出せないよ）

『あ～、メンドクセェ！　俺が一気に…！』

（ちょっとモモ！　暴れないで！）

頭の中が大暴れしているのに、良太郎はポーカーフェイスを貫いている。少女にはどうやらもう余裕はなく、今にもトリガーを引きそうだった。

（ちょっと、やばいかな？）

その時…

「岳羽！」

奥から声が聞こえた。その声に少女の警戒心は一気に解ける。

声の主が近づいてくる。

（わぁ…）

現れたのは同じ月光館学園の制服を着ている。見た感じ良太郎より年上っぽい。

（綺麗な人だな…）

『良太郎。珍しく惹かれてるとこ悪いけど…彼女、『桐条』だよ』

それを聞いて良太郎の気持ちが１８０度変わる。

（じゃあ、この女（ヒト）が？）

『うん、『桐条美鶴』…桐条の直系だ』

（じゃあ…利用価値はあるね）

「『野上良太郎』…だな？」

「はい」

「随分と遅い到着のようだが？」

「電車が遅れてしまいまして、僕も予想外でした」

これは本当のことだった。予定ではかなり前に到着しているはずだったのだ。

「そうか、それは災難だったな。私は桐条美鶴。君と同じ月光館学

園の3年生だ」

「よろしくお願いします。それと、そっちは？」

「えっ…あっ、私は岳羽ゆかり。月光館の二年。よ、よろしくね」

「野上です。同じ二年生。よろしく」

と軽く会釈をする。

「もう夜も遅い。今日はもう部屋で休むといいだろう。岳羽。彼を部屋に案内してくれ」

「は、はい」

「こっちよ」

良太郎はゆかりに連れられて、二階の端部屋に案内された。

「ここがあなたの部屋。荷物はもう届いてるって。後、鍵はなくさないように。すっごく怒られるから」

「そう…ありがと。ところで…この寮には他に人はいないの？」

「えっと、さっき会った桐条先輩と私、それにもう一人三年生の男

の先輩がいるよ」

「へ～、妙だね。こんな立派な寮なのに僕をいれて四人しかいないなんて」

「そ、それは…」

「立派だけど新築って感じしないし…もしかしてつい最近寮になったの？」

「そ、そうなの。男子寮も女子寮もいっぱいになって急遽…できたんだ」

「ふ～ん」

良太郎はドアノブに手をかける。

「あ、あのさ…」

「ん？」

「今日見た事…誰にも言わないほうがいいよ」

「……」

（まったく…言うに事欠いてこれか…どうやら対応が下手そうだね）

良太郎は少し笑って…

「わかってるよ。君もあんまり無茶しないでね。女の子なんだから

さ」

「なっ！？」

「おやすみ」

「う、うん。おやすみ」

それだけ言うとゆかりは去っていった。それをみて良太郎は部屋に入った。

「さってと、今日は疲れたね」

『そうだな…まったく、あのねーちゃんテンパリすぎだろ』

「そうだね…慣れてないって感じ…」

そこまで言って良太郎は何かに気づいた。

「…まったく」

（ウラ…気づいてる？）

『あそことあそこ。あとこっちにもう一つ』

ガチャガチャ…

良太郎は荷物の入ったダンボール箱からトンカチと長めの釘を取り出す。

引越し先で棚を組み立てる時の為に買っておいたものだ。

「盗撮は犯罪です」

良太郎は椅子を土台にして、ウラの指した三箇所に…

スコンッ！（ガジャッ！）スコンッ！（ゴギャッ！）スコンッ！（ガチャッ！）

釘を刺した。

「これでよし。今日はもう寝よう。明日から学校だ」

と、着替えてベットに入った。

「う～ん…」

良太郎は目を覚まし、ゆっくりと体を起こす。

「おあよう」

返事は聞こえない。

「まだ寝てるな…起こさないでおくか」

良太郎は起きて、顔を洗い、歯を磨き、制服を着る。

「まさか本当に高校に通うなんてな…」

以前は高校に通っていなかった。

この月光館学園に転校する為に送った書類は全部偽物で、『ウラ』と『リュウ』の力をフルに使った結果だ。

編入試験だけは実力で受け、晴れて2年生として入ることができた。

(少しでも怪しまれるわけにはいかないからな)

良太郎は昨夜の事を思い出す。

向こうはもう影時間で自分が動ける事を知っている。

昨日監視カメラを壊したが、またしかけれらるかも知れないので、帰ってきたらまた潰さなければならない。

「まっ、暫くは高校生活を楽しもう…」

コンコンッ

ドアからノック音が聞こえる。

「岳羽ですけどー、起きてますか？」

ドア越しに聞こえてくる声岳羽ゆかりの声だ。

「おはよう、岳羽さん」

「おはよう、野上君。昨夜は眠れた？」

「うん。ぐっすりと」

笑顔たっぷりに言うとゆかりは引き攣った顔をしている。

どうやら、昨夜の事が後ろめたいらしい。

「ところでどうしたの？」

「あっ、えっと。先輩に案内しろって頼まれちゃって。それに時間もそろそろマズいし」

「そうなんだ。どうもありがとう」

「もう出られる？」

「うん、仕度はもう終わってるよ。学校までよろしくね」

良太郎は笑顔で答える。

「うん。まかせて」

その笑顔にゆかりも少し絆された。

そうして、二人は向かった。

これから先の運命で、重要な場所となる『月光館学園』へ…

第2章／俺、参上！

良太郎はゆかりの案内を聞きながら駅へと到着した。

少しゆかりに待ってもらい、駅の電子機器に学校から事前に伝えられていたキーコードを入力して、半年分の定期を買う。

そして二人でモノレールに乗る。

モノレールにはスーツなどを着た人間の他に自分と同じ制服を着た人が多く見える。

モノレールから見える施設の説明を聞きながら、

「あ、ほら」

ゆかりが視線を向ける。

良太郎も同じ方向へと視線を合わせると、

「あれが私立月光館学園よ」

目的地である月光館学園に到着した良太郎は学園をキョロキョロ見渡した。

編入試験を受けに来た時にもここに来たが、高校にしてはかなりのハイレベルな施設だ。

『へぇ〜、ここも随分変わったね』

（ウラ？）

『なんでもないよ。すぐに解る事だから』

意味深なウラの台詞を聞きながら、ゆかりから各教室の説明と職員室の場所に案内してもらう。

「岳羽さん助かったよ。ひとりだったら倍の時間はかかってたかも」

「どういたしまして。あ、あそこが職員室だよ」

「うん、ありがとう」

「それじゃ」

良太郎は彼女が去っていく姿を見る。

『何かを知ってるってかんじじゃなかったね』

『案外、お仲間かもね』

『お仲間？』

ウラの言葉に良太郎は疑問を浮かべる。

『簡単な事だよ。僕達と同じように『桐条』を探りに来てる…』

それを聞いて良太郎はナルホドと思う。

『四人』の話では研究はかなりの規模で行われていたと聞く。

それならば規模なりの『関係者』がいる筈だ。

そして…『関係者』から『その家族』へと枝分かれもする…

『凄いねウラは。どうしてそこまでわかるの？』

『なぁに、女の子の事なら任せてよ』

『ナンパは程々にしてね』

しかし、監獄の様に監視カメラ付きの部屋といい、自分と同様に『あの時間』の中で生きている人間。

そこから出した予測は、

『桐条は…まだ本当に研究を続けてるんだね』

『だろうね…『僕達の進化形』ができてなきゃいいけど』

それを聞くと、良太郎の心が重くなる。

『…そうだね。ところで…他の3人は？』

『寝てる』

『……』

良太郎は溜息を吐いて、

「失礼します」

職員室に入室した。

職員室で対応してくれたのは彼の所属するクラスの担任となる鳥海教諭だった。

話の途中で職員室での鳥海教諭は自分の経歴を見て、気まずそうな顔をした為に、良太郎は苦笑いをする。

（実際は…寂しく無かったんだけどな…）

そう、あの日僕は両親と姉さんを亡くした…

（でも、僕には…みんながいたから…）

その後は鳥海教諭の案内で始業式が行われる講堂へ移動する。

校長の話が無駄に長いので『キン』と変わろうかと思ったが、大鼾をかかれて注目されるのはまずいので耐えた。

すると後ろから声をかけられる。

男子生徒が、自分とゆかりが一緒に登校してきた所を目撃したので、色々と問いただしてきた。

良太郎は振り向かず男子生徒に適当な相槌を打ちながら聞き流そうとしたが、

ビュン…

「？」

一瞬良太郎が俯くと、男子生徒は何かと思ったが、すぐに良太郎が顔を上げる。

「へぇ、ゆかりちゃんって結構人気あるんだ」

男子生徒に振り向いた良太郎は先程とは違った雰囲気を出している。

黒縁のオシャレ眼鏡をかけ、髪形も変わっているが、良太郎の後ろ頭しか見てなかった男子生徒は気づかなかった。

「あ、ああ。岳羽ってあのルックスだろ。だから男子に結構人気あるぜ」

「そうだろうね～」

「もしかして、お前と岳羽付き合ってんの？」

「いや、付き合ってないよ…でも」

『良太郎』は少しにやっと笑って、

「狙った獲物は、釣り逃がしたことはないね」

その笑みに男子生徒は『こいつ只者じゃねぇ』と思った。

その後は特別目立った出来事も無く、放課後が訪れる。

『良太郎！遊びに行こうぜ！この辺のチンピラをとっとマトメネェとよ！』

『それより女の子釣りに行こうよ』

『い～や、修行の為の道場破りや！』

『僕、広場に行って踊りた～い！』

街を回って、この辺の地理を覚えるかと考えていた良太郎は、

（そうだな…『モモ』か『ウラ』に任せれば表と裏を調べられるな）

『モモ』は路地裏で喧嘩、『ウラ』はナンパと推測して、どっちにしようかと悩んでいると、

「よっ、転校生」

陽気な声で声をかけられる。

振り向くと一人の男子生徒がいた。

顎鬚を生やした顔に帽子を被った陽気そうな少年だ。

『あ～、いいなあの帽子！高くてカメちゃんがダメって言ったヤツだ！』

「こんにちは、確か君は…？」

少年は『へへっ』と笑いながら、

「なんか、マイペースな奴だなー、オレは『伊織順平』、順平でいいぜ。よろしくな！」

それに応じて

「僕は『野上良太郎』。良太郎でいいよ」

自分の名前を名乗ると順平から握手を求められたので、応じるて握手をすると、ブンブン振られた。

「実はオレも中2の時転校してきてさ、やっぱあれじゃん、転校生って色々なじめないから、オレが先に声をかけようかなって思って

さ」

『陽気なお人好しみたいだね』

『アホ！これが人情ってやっちゃ！』

頭の中で『ウラ』と『キン』が話していると、ゆかりがやってきた。

「あ、岳羽さん。」

「お、ゆかりッチじゃん」

「まったく相変わらず馴れ馴れしいんだから。少しは相手の迷惑考えたほうがいいよ」

ゆかりは順平を呆れながら見て忠告する。

「なんだよ、親切にしてるだけだって！」

「それにしても偶然だね」

ゆかりは良太郎に近づいて、

「同じクラスになるなんて」

「そうだね」

良太郎が答えると、順平がニヤニヤしながら聞いてくる。

「なんか扱いちがくねえ？　聞いた話じゃ、お二人さん仲良く登校

したらしいじゃないの」
「ちょ、ちょっと」
「ただ一緒に来ただけだよ」
ゆかりは良太郎に顔を近づけると、
「ねえ、昨日の夜の事、言ってないよね。」
「…こんな時にそんな事聞くのって、フォローできないよ」
「？」
「き…き、昨日の…？」
「はっ！？」
ゆかりは順平を見る。
「…夜って…？え？」
「ちょっ…なんか誤解してない？あぁ、もう、とにかく！」
完璧に誤解している順平と、焦りながら誤解を解こうとしているゆかりの様子を眺めていた。
（いいな…『高校生活』…うん、気に入ったよ）
そう思うと、自身も関係している誤解を解くのにゆかりに加勢した。

誤解が解けるとゆかりは行ってしまい、男二人で下校した。

帰宅後…

「はぁ～、またか…対応速いね」

スカコン、ガシャン×3

「さってと…で、誰が勝ったの？」

『俺！』

「わかった。じゃあ…」

良太郎はダンボール箱から服を取り出す。

黒革のライダースと同じ黒の革パン。

それを着て出て行った。

その日、新しい支配者が裏路地に降臨した。

翌日の放課後…良太郎は街の散策をしていた。

幼い頃に住んでいたとはいえ、記憶には殆どなく、街を歩くのは新鮮だった。

（ここは…僕がいなくなった後も『時』を刻んだんだな）

良太郎は少し大きめの広場に出ると

『♪～♪～♪～』

軽快なダンスミュージックが聞こえて来る。

『あ～、みんな踊ってる！ねぇ良太郎！僕も踊りた～い！』

「仕方ないなぁ…5時までだよ」

『は～い』

良太郎が瞳を紫に光らせると、帽子を被ってダンス勝負を持ちかけた。

良太郎が寮に戻ると、ラウンジのソファにゆかりと見覚えのない男がいた。

男は眼鏡をかけたにこやかな紳士だ。

「あ、帰ってきました」

「なるほど…彼か」

眼鏡をかけた男は良太郎に声をかける

「やぁ初めまして」

「あなたは？」

「これは失礼。僕は『幾月修司』。月光館学園の理事長をしている者だよ」

「理事長…さん、ですか？初めまして。『野上良太郎』です」

「いやいや、突然来て申し訳ないね」

「僕に何か？」

「僕は理事長だからね。色々と君に申し訳ない事があるんできたん

だ」

「申し訳ないこと？」

「まだ男子寮への君の部屋割りが決まっていないんだ。もう暫くかかるからその間この寮で過ごしてくれないか」

「それぐらいでしたらいいですよ。僕はかまいません。結構気に入ってますから」

「はは、そうかい。ここには岳羽君と桐条君、それに『真田』君しかいないからね」

「真田…？」

良太郎は首をかしげる。

「ああ、君はまだ会ってないのかな？桐条君と同じ3年生の子だ」

「そうですか…それにしても、立派な寮の割には人がいませんね。それに男女共同なんておかしくないですか？」

『あ、あはははは…』

理事長とゆかりは乾いた笑いを漏らした。

「他に何かあるかい？」

「いえ、特にはありません」

『良太郎、あまり理事長さんを信用しないほうがいいよ』

『ん？』

『僕と同じ『人種』…ベクトルがなんか、ちょっと、違うかな？』

『何それ？』

しかし、良太郎は最初の『人種』だけがわかった。

目の前にいる理事長は…

「転校したばかりで疲れるだろ？ゆっくり休むといい。身体なんてぐーぐー寝てナンボだからね。昔、マンガにあったろ、ぐーぐーナンボ。」

春なのに極寒の風が吹いた。

「なんちゃって」

そういって、幾月は去っていった。

ゆかりが深い溜息と共に

「ごめんね」

その後、良太郎は少し出かけた。
服装はまた違い、スーツだった。

深夜

「お疲れ様」

部屋の中へと入ってきた幾月が先に部屋に居た美鶴とゆかりに告げる。

幾月は部屋を見渡し、

「真田くんは？」

「…いつもの『トレーニング』です」

「おやおや、相変わらずだね」
顔を引くつかせている美鶴に行く月は
「どうだい、彼は？」
「見ての通りです」
話題を変えようと続けたのだが…
「あっちゃ～、またかい？」
「またです」
美鶴達の居る部屋の中にはそれ以外にも幾つかのモニターが有り、
それぞれが寮内を映し出していたのだが、中央の巨大モニターだけ
が砂嵐だった。
「これじゃあ、どうなっているのか分からないねえ。」
「ええ、それに…もうすぐ『時間』に入ります」
「普通に寝ているか…それとも」
幾月は時計を見て0時になったのを確認するが…
「…当然だけど、何もなしか。」
「ですが、彼がこの時間を体験していると言う事は…」

「…適正が…まあ、有るんだろうねえ、影時間の中を歩いて来たみたいだし。でなければ、今頃は奴等の餌食だ」

幾月は溜息を吐いて、

「まあ、一度監視してみないと…何個までカメラ経費で落ちるかな」

「隠れてこんな事をするのは気が引けますけどね…」

「大丈夫、まだ未遂だよ。たぶん」

朝、良太郎は起き上がり、伸びをする。

「久しぶりに見たな…あの場所」

良太郎は久しぶりに『あの部屋』へいった。

以前あったのは１０年近く前だ。

あの時…

「僕は、『契約』したんだ」

そして見たばかりの夢の中で『契約に基づいてお渡しします』といわれた『鍵』があった。

「さてと…今日も一日頑張ろう」

放課後…

「つ、疲れた…まったく、『キン』はやりすぎなんだ」

『良太郎、すまん』

頭の中で『キン』が謝る。

学校の帰りに少し打撃系の道場を見つけて、『キン』のテンションがあがり、一番強い人と戦って勝利した。

「まあ、ちょうどいいよ。今日は…『満月』だ」

頭の中にも緊張が走る。

『へへ…わくわくするじゃねぇか』

『まったく、モモは』

『皆、手筈はわかってるよね』
『わかっとる。今日はモモの字だけや！』
『モモタロスが負けたら僕がでるね！』
『負けるかアホンダラ！』
頭の中で大乱闘が始まる…
「『時間』まで…寝よ」

「今日も潰されたのかい？」
「…はい」
「次は僕の給料から差っ引くて言われてるんだけど」
「残念です」
「せ、先輩。素で返しちゃ可哀想ですよ」
幾月が落ち込んだが、気を取り直して、

「と、いうわけで。ここに別の調査結果が」

「なんですそれ？」

「彼の行動をつけさせた」

と彼は何枚かの写真を取り出した。しかし、

「…これ、本当に野上君ですか？」

「そ、その筈なんだけど」

「全員別の人間じゃないのか？」

出てきた写真は学生服姿の良太郎と…

「うっわー、髪逆立てて赤のメッシュ…ワイルドだ」

「こっちは女性に声をかけている所だな。眼鏡をかけている。ん？これは…青か？一部髪を染めているな」

「こっちは空手の胴着を着た人に張り手をかましているね。髪長いな。あっ、金メッシュ入ってる」

「すごい、ブレイクダンスだ。ん？髪型また違う。ウェーブかけて…紫？」

『……』

3人は沈黙。そして…

「理事長…使えませんね」

「ち、違うよ！同一人物だって調査した人は…」

突然、無線の呼び出し音が鳴り響いた。

ここに通信がかかってくるという事は、ここに居ない最後の一人である『真田明彦』の様だが…

『凄い奴を見つけた！　これまで見た事もない奴だ！』

彼の声は切迫していた。

『見た事も無い奴』とは、考えるまでもなく、『奴等』だろう。

そして

『ただ、生憎追われていてな…もうすぐそっちに着くから、一応知らせておく。』

『なっ！？』

それを聞いて3人は絶句する。

「それ…『ヤツら』がここに来るって事ですか！？」

「ひとまず今日の監視は中止だ！理事長！我々は応戦の準備をします！」

「真田先輩！」

ラウンジに三人がが駆けつけると一人の男が座り込んでいた。

三人が少年…『真田明彦』に駆け寄る。

「大丈夫だ」

と言い張っているが、何処かを負傷しているのだろうか、その顔を歪めている。

「それより凄いのが来るぞ。見たらきっと驚く」

「面白がってる場合か！　これは遊びじゃないんだぞ、明彦！」

「そ、それより真田くん、奴らなのかッ！？」

美鶴が激昂し、幾月が問いかける。

その瞬間、寮全体を大きく揺れた。

地震ではなく、何にかに『叩かれた』振動と音。

「何この揺れ…冗談でしょ！？」

「理事長は作戦室へ！　岳羽は二階にいる彼を非難させてくれ！」

美鶴が冷静に指示を飛ばす。

「えっ…？先輩たちは？」

「ここで何としても食い止める。明彦、連れて来たのはおまえだ。責任は取ってもらうぞ」

「ヤツらの方が勝手について来たんだ！　まったく…」

美鶴の言葉に明彦は立ち上がり、ヤツらを迎える為、戦闘体勢をとった。

『おい、良太郎』

『モモ』の声を聞き、良太郎は起き上がる。

『来たぜ…奴等の匂いだ。まっすぐこっちに向かってやがる』

「そう…」

良太郎は服を着替える。

着替えるのは、赤いシャツ、黒のライダースにレザーパンツ。

着替えている間に寮全体が揺れる。

『面白くなってきやがったぜ！』

「ここ潰れたら野宿かもしれないんだよ」

良太郎は溜息を吐く。着替え終わると、

『さぁて、迎え撃ちますか！』

「そうだ…」

ドンッ！ドンッ！

「野上君！起きて！」

『……』

「先に着ちゃったね」

良太郎はのんびりドアをあける。切羽づまったゆかりの顔が見える。
「どうしたの？」
あまりにものほほんとした態度に
「落ち着いてる場合じゃない！」
ゆかりが切れる。
「とにかく逃げるわよ。こっちに来て！」
と、良太郎の手を乱暴に引っ張り、連れ出した。ゆかりに引っ張られて、裏口へと辿り着く。
「ここ？」
「うん、ここまで来れば……。」
ドンドンッ！
「！？」
突如、ドアが乱暴に叩かれる。
「こ、こっちに来てるの？」
「乱暴なノックだね。今開け…」
「るな！」

またもや乱暴に引っ張られて、その場を後にした。

最上階から屋上へと出て、ゆかりが思いっきり扉を閉めた。

「ここまでくれば…少しは…」

「あの岳羽さん」

「何よ！なんであんたそんなに落ち着いてるのよ」

「まあまあ、落ち着いて。そんなにあせらないで。ところで『良い話』と『悪い話』があるんだけど…どっちから聞きたい」

この状況で何をいうんだこいつは、と思ったが…

「じゃあ、良い方から」

「助けにきてくれてありがとう」

「あ、お礼。気にしないで」

「悪い方なんだけど…ここは逆効果だよ。逃げ道もないし」

「え？」

屋上の際から何か『黒いモノ』が這いずってくる。

「……」

「うそ…」

上げるゆかり、それを見る良太郎…二人の視線の先には、夜空に浮かぶ…巨大な仮面だった。

ビュォォォッ！

黒い仮面に向かって巨大な黒い影が飛び上がる。

ドシィィィィンッ！

人間の2倍はある巨体は屋上に轟音と共に着地する。

すると巨大な仮面は巨体の腹部についた。

「くっ、しゃ…」

「『シャドウ』」

「え？」

ゆかりは驚く。今彼はなんといった。

良太郎は立ち上がり、巨大シャドウに近づく。

「野上君！下がって！」

「『うるせぇよ！ガタガタ震えてるならそこで見物してろ『ゆかりごはん』のねーちゃん！』」

「は、はい？」

「ゆかりごはんはないんじゃない？」

「『うるせぇよ！ゴチャゴチャいってんじゃねぇ！良太郎』」

ゆかりは幻聴が聞こえいるのかと錯覚する。

何せ確かに喋っているのは『良太郎』なのだが…

（全然声が違う！？）

「『あん？』」

『良太郎』は『シャドウ』を見る。

「『なんだよ。うるせぇな。いいだろうが俺が何してようが。わかってんのは俺が今からお前をカッコよく倒すって事だよ』」

『良太郎』は『シャドウ』と会話した後、

「いくよモモタロス！」

『よっしゃ！』

突如良太郎の体から赤い光球が現れる。

赤い光は地面に近づくとカタチを取っていく。

現れたのは…

「お、鬼！？」

そう真っ赤な…『鬼』だった。

「俺！」

赤鬼は自分を親指で指し、次に大きく腕を広げて

「参上！」

決めポーズを取った！

これがＳ．Ｅ．Ｅ．Ｄと『契約者　野上良太郎』と『特殊シャドウＣＯＤＥ：００１』…『モモタロス』との本当の邂逅だった。

第3章／Double－Action －SWORD FROM－

『俺！　参上！　さぁって良太郎！　ガンガンいくぜぇ！』

モニターに映ったモモタロスを見て、美鶴・明彦・理事長の3人は驚愕する。

「なんだあのペルソナは！？　喋ったぞ！」

「まさか…ペルソナが明確な意思を持っているとでも！？」

二人の狼狽とは別に理事長だけが別の驚きを見せいてる。

（まさか…実験体『？』シリーズ。消滅していなかったのか…？）

「さぁって良太郎！ガンガンいくぜぇ！ほらよ！」

モモタロスはどこからともなく二本の大剣を出し、一本を良太郎に渡す。

「まったく。強引だね、いつも」

「へへっ」

良太郎とモモタロスが笑いあっていると、大型シャドウが小刻みに

動き出す。

「モモタロス、こいつは…」

「ああ…匂いからして『マジシャン』…だな。さっさと片付けるぜ」

「そうだね…って、そういくかな？」

大型シャドウ…『マジシャン』の体の中から仮面…小型のシャドウが現れる。

それも複数体だ。

「これがコイツの能力か？　くんくん、同じ匂いだな。セッコイ能力だぜ」

「どうやら同系統のシャドウを呼ぶ事ができるみたいだね」

シャドウ達は目の前の存在に警戒している。

「よ～し、良太郎！　『アレ』いくぜ！」

「『アレ』ね。よっし！　やろうか！」

「特訓（ケンカ）の成果みせるぜ！　そりゃそりゃそりゃぁぁぁぁっ！」

モモタロスがシャドウの一体に突っ込んで行き、

ザシュッ！

思いっきり叩き斬る。そこに別のシャドウが襲ってくるが、それを良太郎が斬り、そしてまたモモタロスが斬る。

大胆豪快なモモタロスの攻撃、それを隙間無く流れるようにフォローする良太郎。

二人は息のあったコンビネーションでシャドウを斬り倒していく。

「俺達の！」

「必殺技！」

『ダブル！』

ザシュッ！

雑魚のシャドウを倒すと、良太郎が『マジシャン』に渾身の一撃を食らわす、が倒れない。

しかしそこに！

『クライマックス！』

ザシュッ！

モモタロスも一撃を喰らわす！

『ソード！』

ザザシュゥゥゥゥッ！

最後に二人でのクロス斬り！
マジシャンはたまらず倒れてしまった。
「僕達は！」
「最初っからクライマックスだぜ！」
互いの剣を頭上に掲げ、クロスし、キメ台詞を放つ！
『決まったね（ぜ）！』
バシッ！
二人は力強く互いの手を叩いた。
「おい、ゆかりごはん。いつまで腰抜かしてんだよ。まだまだこれからだぜ」
良太郎とモモタロスの戦いを見て呆けているゆかりにモモタロスが声をかける。
「え…あっ、ちょっと！　『ゆかりごはん』て何よ！？　私は『ゆかり』よ！」
「へっ！　たいしてかわんねぇだろ」
「変るわよ！」

「まあまあ岳羽さん」

ゆかりとモモタロスが口喧嘩をしそうになったので、良太郎が割ってはいる。

ゆかりは怒鳴り上げて、落ち着くと

「…って！？　ペルソナが喋ってる！？」

「喋ってるね」

「なんだ？　喋ってたら悪いってのかよ！」

ゆかりは瞳に警戒の色を強めて、

「あ、あんた達…何者なの？」

「僕は野上良太郎だよ。それ以外はないよ」

「俺はモモタロスだ！」

「も、もも…たろす？」

ゆかりは真剣な顔をして聞いていたが、『プッ』と笑い、

「変な名前」

「な、なにぃ～！」

「二人とも落ち着いて。来るよ」

『え？』

ふたりが良太郎が見ている方を見ていると、もがいていた『マジシャン』が立ち上がり始めた。

「ま、まだ生きてる…！？」

「へっ、おもしれぇ。まだまだ楽しめるってわけかい」

「早く倒す…よ、うぐっ…」

突然良太郎に異変が起こる。

「モモ…タ…ぐぁっ…」

良太郎が苦しみだし、耐え切れず膝を付いた。

「良太郎！？」

「野上君！？」

「くっ、あ、あぁ…来る…あ、『アイツ』が…」

「ちぃ、やっぱりきやがった！」

ゾクゥッ！

「ひっ！？」

良太郎の背後から何やら恐ろしいモノを感じる。
ゆかりは体を震わせ、固まる。
その恐ろしい気配は自分を鷲掴みにして、動けない。
そして…『マジシャン』も呼応するように止まっている。
そう、まるで喜ぶように…
「てりゃぁ！」
その時！モモタロスは赤い光球となり、良太郎に向かって…
ビュンッ！
良太郎の体に入った。
「あっ…」
恐ろしい気配が一瞬で消え去る。
ゆかりも急速に心に落ち着きを取り戻す。
すぐに良太郎の方へ振り向き、
「野上君！　大丈…夫…？　あれ？」
良太郎が立ち上がる。

しかし、それはさっきまでの良太郎じゃなかった。
髪は逆立っており、赤のメッシュがある。
そして顔つきも好戦的な目でゆかりでも感じるほど闘争心がギラついていた。
良太郎は親指で自分を指し、
「俺！　またまた参上！」
と手を大きく広げてお決まりのセリフを轟き叫んだ。
「の、野上君じゃなくて、モモタロウ！？」
「モモタロウじゃねぇ！　モモタロスだ！　あほごはん！」
「誰があほごはんよ！　それだと原型がないじゃない！」
モモタロス・良太郎＝M良太郎とゆかりが怒鳴りあう。
「今わかったわ！　理事長が調べた野上君の七変化ってあんただったのね！」
「うるせぇ姉ちゃんだな！　わりぃかよ、へッだ！」
M良太郎は『マジシャン』に目を向ける。
「おい、マジ野郎。残念だったな、目的が外れて」

M良太郎が『マジシャン』に話しかける。

心なしかゆかりには『マジシャン』は怒っているように見えた。

「まあ、これから俺にカッコよく倒されるんだ。良太郎！　いけるか！？」

『うん…もう大丈夫だよ』

「そうか。いくぜ！」

M良太郎の両手に光が集り、何かを形作る。

光が固まると、右手には一本のベルトが現れた。

これこそ、良太郎の本当の封神具（チカラ）。

M良太郎はそれを腰に装着し、

「いくぜ！」

M良太郎は手に一枚のカードを出す。

そのカードには…『ＷＯＲＬＤ　ＭＯＭＯＴＡＲＯＳ』と文字が書かれ、モモタロスが浮びあがっていた。

（いこう！　モモ！）

２つの声重なる時、

『変身！』

誰よりも強くなれる！

『ＳＷＯＲＤ　ＦＲＯＭ！』

赤いボタンを押し、カードをベルトの中心にスキャンした瞬間、Ｍ良太郎の周りに光の粒子が現れ、Ｍ良太郎を包む。

光に包まれたＭ良太郎が現れた時、

「な、なに…あれ…」

なんと白い装甲服のような物を着ていた。

そして次の瞬間、突然いくつかの物体が現れ、Ｍ良太郎にセットされる。

セットされた物体は赤い鎧となり、そして高等部から赤い桃のようなモノが顔面に移動してきて、

ガシャンッ！

それが眼の位置に到達すると開いた。

その姿は赤い鎧の戦士。

「俺！　再び参上！」

絆のチカラを使い、時と時の狭間で戦う戦士…『電王』が影時間に

降臨した！

『俺！　再び参上！』

「なんだ…あれは…！？」

「まるで…ヒーローだな」

突如、人語を喋るペルソナを召喚器なしで呼び、ペルソナと融合し、さらに『変身』までした。

それは二人の常識をぶち破っている。

そんな二人が驚いている所に、幾月の目線は別のモニターを見ている。

（素晴らしい！　互いの精神波が寸分の狂いもなく、シンクロしている。まさに奇跡だ！　研究が『凍結』された原因を克服している！）

幾月は眼を輝かせる。

「彼は、本当にすごいよ」

「さぁて、とっととキメるか！」

電王ソードフォーム（以後電王Ｓ）は腰に装着されていた物を組み立て始める。

完成すると刃が構成され、一本の剣・デンガッシャー・ソードとなった。

『モモタロス』のカードを取り出す。

『マジシャン』がさらにシャドウを生み出す。

「そんなザコで相手になるか！引っ込んでろ！」

電王Ｓの一閃！

その一閃はシャドウ達を斬り捨て、そのまま電王Ｓは『マジシャン』に突進していく。

「いくぜ…！　俺の必殺技…パート1！」

電王Sがカードをベルトにスキャンする。

『Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ』

ベルトからフリーエネルギーが溢れ出し、体を伝い、デンガッシャーに蓄積される。

マジシャンとの間合いを一気に詰め！

「これで！　終わりだ！」

ザシュウウウウウウウウウウウウウウウ！

その一撃はマジシャンを見事に両断し、斬り口から炎を上げさせた。

マジシャンはもがき苦しみながら、闇へと消えた。

「へへっ、どんなもんだ」

（これで1体…だね）

「そうだな…良太郎。大丈夫か？」

（うん…でも、凄く眠い…）

「寝とけ。その間…俺がこの体使っといてやるよ」

（うん…モモ）

「ん？」

（いつも…ありがと）

「へっ、うるせぇっての」

照れた声を出すと、良太郎の声が聞こえなくなり、M良太郎は変身を解除する。

振り向くと、

「おいおい、いつの間にか増えたな。『ゆかりごはん』に『つるつる女』に…誰だお前？」

「『ゆかりごはん』じゃない！」

「誰が『つるつる女』だ！」

「お、お前凄いな。恐ろしい事を平気で…」

ゆかりと美鶴は憤慨し、明彦は目の前の男に驚愕していた。

美鶴は怒りを抑えて、M良太郎に睨み、

「君には聞きたい事がある」

と告げた。

これが…第1の運命を越えた時だった。

この時、美鶴は『彼』と『彼ら』がどれだけの『覚悟』を持っているのかを知るのはずっと先で、その結果、彼女は自分と自分の家に憎悪を、一人の女性に嫉妬の炎を燃やす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8540q/

ペルソナ３ - AAA DEN-O from -

2011年2月21日03時03分発行